

2025 年度東アジア国際言語学会 第 13 回大会

日時：2026 年 2 月 28 日(土)、3 月 1 日(日)

会場：オンライン(Zoom)

(zoom 情報は、会員にはすでにメールでお知らせしています。会員でない方は下記フォームより参加を申し込みください。 <https://forms.office.com/r/x3Z1TaYRWJ>)

参加費：無料（会員でない方も参加できます）

第 1 日目 2 月 28 日 (土) ※研究発表は発表 20 分、質問 10 分を目安にして行ってください。

※タイムテーブルに示す時間はすべて日本時間です。

13:00-13:05	開会の辞：須田義治（大東文化大学）
研究発表	司会：野田大志（愛知学院大学）
13:05-13:35	1 趙海城（明星大学） 「中国語を母語とする上級日本語学習者の作文使用語彙の特徴について」
13:40-14:10	2 高橋雄一（専修大学） 「複合辞としての「ことなら」について」
14:15-14:45	3 彭広陸（吉林外国语大学） 「名詞型の言語としての日本語論」
14:45-15:00	休憩
講演	
15:00-16:00	井上優（日本大学）「「ても」と”也”」（司会：前田直子（学習院大学））
16:05-17:05	郭春貴（広島修道大学名誉教授）「これからの中中国語教師に求められる資質・能力は？」（司会：畢文濤（北京語言大学））
17:05-17:15	閉会の辞：福田翔（富山大学）

※理事の方は 17:25-18:05 理事會

第2日目 3月1日（日）※研究発表は発表20分、質問10分を目安にして行ってください。

9:55-10:00	開会の辞：高橋雄一（専修大学）
研究発表	司会：佐々木俊雄（東洋大学）
10:00-10:30	1 徐幸華（奈良女子大学大学院博士後期課程） 「日本語連体修飾節における制限的・非制限的用法の中国語訳」
10:35-11:05	2 李曉倩（奈良女子大学大学院博士後期課程） 「複文における“心里”の役割」
11:10-11:40	3 加藤夏希（名古屋大学大学院博士前期課程） 「広東語の卑語に関する研究—「闊（撫）(1an2)」を中心に—」
11:40-13:00	休憩 ※会員の方は 11:40-12:20 総会
研究発表	司会：志波彩子（名古屋大学）
13:00-13:30	4 孫聰雨（大阪大学大学院博士後期課程） 「感情誘発の使役受身構文における使役主の格選択 —日本語の格体系との関連を中心にして—」
13:35-14:05	5 楊文華（岡山大学大学院博士後期課程） 「現代日本語における副詞「わりに／と」の意味用法 —評価性と基準に着目して—」
14:10-14:40	6 楊延蘭（名古屋大学大学院博士後期課程） 「「動詞述語+ながら」構文の多義性について」
14:40-14:50	休憩
研究発表	司会：小嶋栄子（元長崎短期大学）
14:50-15:20	7 邢立中（岡山大学大学院博士後期課程） 「勧誘文としての「スルカ」「シナイカ」を述語とする文について」
15:25-15:55	8 卢鳳雪（广西大学大学院博士前期課程） 「『砂の女』における「てしまう」の使用実態と文学的機能」
15:55-16:05	休憩
研究発表	司会：青木萌（長野大学）
16:05-16:35	9 賈兆昆（東京大学大学院博士後期課程） 「存在文と所有文との曖昧性に対する日中両言語の対照研究 —「概念」と「実体」との対立の視点から—」
16:40-17:10	10 孟慧（専修大学） 「翻訳課題を通した中国語母語日本語学習者の誤用の特徴 — 直訳文と意訳文の比較研究」
17:15-17:45	11 史曼（中国陝西師範大学） 「基于生成词库理论的汉日并列关系复合动词对比分析」
17:45-17:55	閉会の辞：趙海城（明星大学）

【発表要旨】

第1日目 2月28日（土）

13:05-13:35 趙海城（明星大学）

「中国語を母語とする上級日本語学習者の作文使用語彙の特徴について」

概要：

本発表では、北京日本語学習者縦断コーパス「B-JAS」の4年次に実施された非対面調査作文課題を用い、中国語を母語とする上級日本語学習者と日本語母語話者の語彙使用の異同を分析した結果を報告する。

対象は、中国語母語の日本語学習者17名（以下CLJ）と日本語母語話者17名（以下JNS）の計34名であり、各自が3本ずつ執筆した作文計102編（総語数90,120語、CLJ:44,187語、JNS:45,933語）を量的に分析した。分析項目は、CLJの品詞別使用傾向、特徴語（過剰使用語・過少使用語）、さらに語彙密度・語彙多様性・語彙の洗練性の三側面から測定した語彙的複雑度（lexical richness）である。

分析の結果、品詞別では、CLJはJNSに比べて名詞・副詞・代名詞・形容詞・形状詞・感動詞を多用する一方、助詞・助動詞・動詞・接尾辞・接頭辞の産出が少ないことが明らかになった。特徴語では、CLJは「中国、ペキン、CCB、小説、省、回、の、愛、第、世界、卓球、笹、夢、一番、語、私（代名詞）、ブカン、作家、英語、ちゃん」を過剰使用し、「ます、です、花火、逆も、県、櫻坂、行く、御、そんな、メンバー、祭り、絵、行う、チーム、ノギザカ、桜、オカザキ、笑い、大会、勧める」を過少使用していた。語彙的複雑度の比較では、CLJは全課題においてJNSより語彙密度と語彙多様性が高い一方、語彙の洗練性はJNSより低い傾向が確認された。

13:40-14:10 高橋雄一（専修大学）

「複合辞としての「ことなら」について」

概要：

複合辞の「ものなら」（例：できるものなら世界中を旅行してみたい）は文型辞典や先行研究で多く取り上げられているが、これを「ことなら」に置き換えた表現（例：できることなら世界中を旅行してみたい）は、複合辞として取り上げられることは多いようである。本研究は、このような「ことなら」がどの程度複合辞としての性格を持っているのか、また、「ものなら」や「のなら」「なら」とどのように異なるのかについて論じる。

「ことなら」には、慣用表現的な「なろうことなら」がある（例：なろうことなら、一生おそばにお仕えしたい気持ちです）。上に挙げた「できることなら」はこれに近く、より新しい表現と推測できる。一方、「できるものなら やってみろ」が「??できることなら やってみろ」では不自然になるという使用の制限も見られる。さらに、「なら」と共に「のなら」が使用できるとされる「認識的条件文」は、先行研究の例文によると「ものなら」「ことなら」は使用できないようである。ただし、特に「ものなら」については反例になりそうな用例も見られる。以上のような観点から、「ことなら」とその周辺について論じる。

14:15-14:45 彭広陸（吉林外国語大学）

「名詞型の言語としての日本語論」

概要：

品詞が自然言語における単語に関する文法的分類であり、そのうち、《動詞》と《名詞》がもっとも基本的な二大品詞であるということは周知の通りである。言語類型論の観点から自然言語を《動詞型の言語》と《名詞型の言語》に二分することができる。つまり、文法的に動詞や動詞句や動詞述語文の使用を重要視する言語は《動詞型の言語》であり、名詞や名詞句や名詞述語文の使用を重要視する言語は《名詞型の言語》である。劉丹青（2010）によれば、中国語は《動詞型の言語》であり、英語は《名詞型の言語》であるという。それに対し、日本語の位置づけは不明のままである。本発表は、連語、文、テキストにおける名詞・名詞句（名詞的連語）・名詞

述語文の文法的振る舞いを考察しがら、日本語は「名詞型の言語」であることを明らかにすると同時に、英語との相違にも言及するものである。

講演

15:00-16:00 井上優（日本大学）

「「ても」と“也”」

16:05-17:05 郭春貴（広島修道大学名誉教授）

「これからの中中国語教師に求められる資質・能力は？」

第2日目 3月1日（日）

10:00-10:30 徐幸華（奈良女子大学大学院博士後期課程）

「日本語連体修飾節における制限的・非制限的用法の中国語訳」

概要：

日本語の連体修飾については、寺村秀夫・奥津敬一郎などによる内的関係と外的関係という分類のほか、機能的分類として、制限・非制限を用いた分類も知られている。制限的・非制限的連体修飾機能については、被修飾語の「名詞の指示性」を中心として論じられることが一般的である。「名詞の指示性」とは、名詞が指示す対象の性質のことであり、定性と不定性に関わる。日中両言語の間では、名詞の指示性（定性・不定性、特定化・一般化）の表示に異なる特徴があり、これは日本語連体修飾節の翻訳に影響を及ぼす。日本語も中国語も定冠詞のない言語であるが、実際の文脈や助詞、格の要素により、名詞の定性・不定性が表現されるという意見がある。本発表でもこの立場をとり、「格関係」、「文脈」、「連体修飾要素」、「助詞」、「テンス・アスペクト」、「共有情報」の6つの指標から、日本語の名詞句の定性・不定性がどのように表示されるか実例に基づいて検討しつつ、日本語の連体修飾を限定か非限定かを判断する。さらにコーパス等を使用し、日本語の連体修飾節が中国語に翻訳される際の実態を明らかにした。

10:35-11:05 李曉倩（奈良女子大学大学院博士後期課程）

「複文における“心里”的役割」

概要：

本稿は日中研究における異なる先行理論を視野に取り入れつつ、主述語文としてみなされる“心里+感情形容詞”および二重主語文としてみなされる同構文の構文的位置付けの違いによって、“心里”は複文においてどのような役割を果たすかを検討した。複文で用いられる“心里”は容器メタファーを介して、感情が生起する空間を構築する機能を担い、自分または他者の心理活動を客体化する一種の中立的心空間の要素として機能することを明らかにした。“心里”は身体部位のデフォルト現象としてみなされる場合、感情形容詞は複文の文脈形成に寄与する一方、「S+“心里”」には「全体一部分」のメトにミー認知様式が存在することが認められる。そのため、“心里”が参照点でない場合はデフォルトとなるが、実際に存在している心理空間を指示する要素であると主張する。さらに、「対比」、「因果」、「条件」、「逆接」といった論理関係を表す複文において、“心里”は省略できない場合があるため、“心里+感情形容詞”構造は複文の文脈形成に一定の影響を与えていたと考えられる。文レベルでは“心里+感情形容詞”は「無界」として捉えられることから、“心里”が「客体性」、「不確実性」、「空間性」の属性を持つことで、ある推理メカニズムが形成され、複文の論理関係を成立させる役割を果たしていると結論づける。

11:10-11:40 加藤夏希（名古屋大学大学院博士前期課程）

「広東語の卑語に関する研究—「闊（撲）（lan2）」を中心に—」

概要：

本研究は、広東語の代表的な卑語表現である五つの語「閑（屨）、闊（撲）、閑（鳩）、閑（柒）」の構文的・意味的特徴の整理を試みるものである。これらは本来、性行為や性器を指す語であるが、実際の日常会話やSNSでは、程度や感情を強調する語などとして頻繁に用いられている。本発表では、このうち最も使用頻度が高いとされている「闊（撲）（lan2）」について考察する。

本研究では、YouTubeのビデオのコメント欄に投稿されたコメントを用いて調査を行った。文中における「闊（撲）」の出現位置に基づき、①挿入（構成要素A、Bの間[A+撲+B]または二文字以上で構成される一語Xの内部[X+撲+X]）②後置（構成要素Aの後[A+撲]）③前置（構成要素Aの前[撲+A]）に分け、さらに構文的・意味的特徴により11パターンに分類した。その結果、「闊（撲）」は出現位置によって異なる意味機能を果たすことがわかった。挿入タイプの場合は、程度や感情、動作量の強意として機能する（例：今日好熱呀！（今日暑い！）→今日好撲熱呀！（今日クソ暑い！））。後置タイプの場合は、「普通ではない性質を持つ人」を表し、前置タイプの場合は、対象（人）に対する著しい侮蔑的な評価を表す。

13:00-13:30 孫聰雨（大阪大学大学院博士後期課程）

「感情誘発の使役受身構文における使役主の格選択—日本語の格体系との関連を中心に—」

概要：

本発表は、感情誘発の使役受身構文において、使役主（原因項）がニ格で提示されやすく、デ格が制限される傾向（例：「私は彼の侮辱的な発言に驚かされた（「で驚かされた」は不自然と判断されやすい）」）に着目し、その格選択を日本語の格体系との関係から検討するものである。感情変化を引き起こす原因是本来さまざまな形で提示され得るにもかかわらず、使役受身構文におけるニ格選好については、これまで十分な説明が与えられてこなかった。

本研究では、BCCWJに基づくコーパス分析および日本語母語話者への容認度調査を通じて、感情誘発の使役受身構文ではニ格が一貫して高頻度かつ高評価で用いられることを示す。さらに、この分布傾向を、日本語において、原因項を事態の中心要素として提示しやすい格（ニ格）と、状況的・補足的に提示しやすい格（デ格）との違いという観点から捉え直す。使役受身構文では、感情変化を引き起こす使役主が事態の中心的・必須要素として認識されやすく、背景的要素を示すデ格よりも、事態の解釈に直接関与しやすい参与者を提示するニ格が選好されると考えられる。本発表では、格選択の分布と母語話者の直感が一致する点を示しつつ、感情誘発の使役受身構文が日本語の格体系的制約を反映する構文である可能性を論じる。

13:35-14:05 楊文華（岡山大学大学院博士後期課程）

「現代日本語における副詞「わりに／と」の意味用法—評価性と基準に着目して—」

概要：

本稿は、現代日本語の副詞「わりに／と」の意味用法を、評価性と基準の観点から体系的に記述することを目的とする。従来、両形式は程度副詞として扱われ、「比較的」「思ったより」などに解釈されているが、「反予想」と「予想通り」と読める用例もあることも指摘されている。そこでBCCWJから「わりに」123例、「わりと」793例を抽出し、共起述語を調査した。その結果、両形式は尺度をもつ形容詞、とりわけ属性形容詞と共に起しやすく、評価的にはプラス寄りに用いられる傾向が確認された。さらに基準を顕在的基準・潜在的基準・含意的基準の三種に分類したところ、潜在的基準が最も多く、基準は明示されるよりも文脈に回収するのが一般的であることが明らかになった。以上より、「わりに／と」を、基準を前提に性質状態の程度を相対的に調整し評価する副詞であ

ると捉えた。本稿ではさらに、基準の現れ方と基準とのズレ度の相互作用で「比較的」「意外と」「かなり」等の意味解釈が生じると主張した。また近年では、程度を相対的に調整するという核心的意味が、自己称賛の場面において自己評価を緩和するという語用論的用法へと拡張している可能性を示唆した。

14:10-14:40 楊延蘭（名古屋大学大学院博士後期課程）

「動詞述語+ながら」構文の多義性について」

概要：

本研究は、「動詞述語+ながら」構文の多義性について分析するものである。

「ながら」には「同時進行」「逆接」「様態」の意味用法があるとされるが、これらの一括的な記述は十分とは言い難い。例えば、「子育てをしながら仕事をする」のように、両事態が必ずしも厳密な同時進行を示さず、反復や交替を伴う複雑な時間関係を含む例も少なくない。また、「ながら」に関する先行研究（和田 1998、村木 2006、梶川 2013 など）は多いものの、形式と意味の両面からの体系的整理には課題が残る。

「動詞述語+ながら」構文の例として、(1)テレビを見ながらご飯を食べる（付随動作）、(2)資料を参照しながら説明する（手段）、(3)ニュースを見ながらふとあることが頭に浮かんだ（契機）、(4)笑いながら話す（様態）、(5)知っているながら無視する（対立事態）などが挙げられ、その意味用法は多岐にわたる。

本研究では、現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）から用例を収集し、主節とながら節の時間的関係及び動作・事態の関連性に着目して意味用法を再検討する。その上で、各意味用法に対応する形式・意味の記述を通して、「動詞述語+ながら」構文の多義性を明らかにする。あわせて、各意味用法間には連続性があることを指摘する。

14:50-15:20 邢立中（岡山大学大学院博士後期課程）

「勧誘文としての「スルカ」「シナイカ」を述語とする文について」

概要：

現代日本語では「ここで休みますか」「ここで休みませんか」のように疑問文を用いて相手に動作を誘いかけることがあり、そのとき肯定形式と否定形式が使い分けられる。従来の研究では「ショウ」「シナイカ」を代表的な勧誘の形式と認め、両者の違いについて考察されているが、「シナイカ」の勧誘文が疑問文から派生したものであり、「スルカ」を述語にする文にも勧誘文（的なもの）があるとすれば、まずは「スルカ」との比較を通して「シナイカ」の勧誘文の特徴を確認することが必要ではないかと思われる。本発表では、小説の会話文の用例を用いて、この点に関する考察を行う。主な結論は以下の三点である。①「シナイカ」を述語とする勧誘文は、話し手の欲求に動機づけられおり、文内容と場面・文脈との結びつきは相対的に弱い。一方、「スルカ」を述語とする勧誘文は、基本的に聞き手や場面の状況に動機づけられている。②話し手の態度の観点から見ると、「シナイカ」は話し手が聞き手と共にその動作を行いたいという欲求が強いのに対して、「スルカ」では、そうした欲求は相対的に弱い。③「シナイカ」は「スルカ」より文法化（勧誘文化）がより進んでいる。

15:25-15:55 卢鳳雪（广西大学大学院博士前期課程）

「『砂の女』における「てしまう」の使用実態と文学的機能」

概要：

1. 研究の背景と目的

安部公房『砂の女』の不条理感は、哲学的考察は多いが、具体的な言語形式による研究は不十分である。本研究は、文法形式「てしまう」に着目し、その使用実態を実証的に調査する。目的は、文法分析を通じて、作品の閉塞感や不可逆性といった文学的テーマが、いかに言語構造レベルで具現化されているかを解明することである。

2. 研究方法

安部公房『砂の女』(筑摩文庫版)全文を対象とし、全ての「てしまう」及びその口語形「ちゃう」の用例を抽出してデータベースを構築する。各用例を「動作の完了」と「話者の遺憾・後悔の感情」に分類し、出現文脈(労働描写、心理独白等)とともに分析する。さらに、機能の出現比率を量的に考察する。

3. 期待される成果と意義

作品内での「てしまう」の具体的な使用実態を提示する。

「完了」機能が労働の反復性を、「遺憾」機能が内的絶望を文法レベルで固定化していることを実証し、文法形式が文学的レトリック装置となり得ることを示す。

日本語の文法研究と文学研究を架橋する、実証的な分析の一例を提供する。

16:05-16:35 賈兆昆（東京大学大学院博士後期課程）

「存在文と所有文との曖昧性に対する日中両言語の対照研究 —「概念」と「実体」との対立の視点から—」

概要：

例文(1)と(2)はそれぞれ日本語と中国語の存在文と所有文の具体例である。「存在文」は「しかじかの場所に、ある対象が存在すること」(西川 2015 : 142)という存在関係を述べる文であり、「所有文」は二つの対象の間にある所有関係を述べる文である。

(1)a. 机の上に(は)一冊の本がある b. 桌上有本书

(2)a. 鈴木さんに(は)お金がたくさんある b. 铃木先生有许多钱

典型的な存在文は(1)のような現実世界における存在主体の位置関係を表す文である。一方、「所有権」、「親族関係」、「全体-部分関係」の所有関係を表す文が典型的な所有文だと言われる(Taylor 1996, Langacker 2009)。日本語と中国語において、両者の典型例は文中の名詞句の有生性によって明確に区別することができるが、例文(3)のような存在文とも所有文とも決め難い例が存在する。(3)は部屋と窓との存在関係と所有関係、両方の解釈ができる曖昧な文であり、同じ曖昧性を持つ文として、柴谷(1978 : 349)は「この机には引出がたくさんある」(“这张桌子有许多抽屉”)、「東京には面白い所がたくさんある」(“东京有许多有趣的地方”)などの例をあげた。

(3)a. この部屋に(は)窓が四つある b. 这间屋子有四扇窗户

本稿はまず認知文法の視点から、(3)のような文の持つ存在と所有との曖昧性の原因を分析する。認知文法によれば、存在と所有は「参照点モデル」という共通の認知基盤を持ち、参照点能力によって話者に認識される。そして、上記の曖昧性は、二つの対象の持つ所有関係に同じ参照点モデルに基づく存在関係が内包されることに由来すると筆者は考えている。さらに、木村(2014)が主張した「概念」と「実体」との対立に基づき、日本語と中国語の存在文と所有文における意味機能上の違いを指摘する。存在文は現実世界にある対象の実体的存在関係を表すが、所有文は対象間にある抽象的、概念的所有関係を表す。この違いを踏まえて、具体的なコンテクストを考慮に入れることで文の曖昧性を消し、存在文か所有文かより明確に判断することができる。

参考文献

木村英樹 (2014) 「“指称”の機能」『中国語学』261号：64-83.

Taylor, John R. (1996) Possessives in English: An Exploration in Cognitive Grammar. Oxford: Oxford University Press/Clarendon.

Langacker, Ronald W. (2009) Investigations in Cognitive Grammar. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.

西川賢哉 (2015) 「存在文」 斎藤純男・田口善久・西村義樹(編) 『明解言語学辞典』: 142 東京：三省堂.

柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』 東京：大修館書店.

16:40-17:10 孟慧（専修大学）

「翻訳課題を通した中国語母語日本語学習者の誤用の特徴 — 直訳文と意訳文の比較研究」

概要：

本研究は、中国語を母語とする日本語学習者の翻訳産出を対象とし、直訳文と意訳文の比較分析を通して、翻訳過程において見られる誤用の特徴およびその言語処理過程を明らかにすることを目的とする。

筆者はこれまでの研究では、日本語の参考訳文を付した中国語の寓話文を翻訳資料とし、直訳および意訳の翻訳課題を実施した上で、学習者訳文に対する誤用分析を行ってきた。本研究はその延長として、異なる文章タイプの中国語文章を翻訳資料に用い、研究設計および分析方法を踏襲しつつ、考察を行う。

本研究では、学習者に直訳および意訳の翻訳課題を課し、その訳文を日本語母語話者が修正する。分析にあたっては、語彙・文法・表記の三つの側面に着目し、誤用の分類については市川（2010）を参照し、「脱落」「付加」「誤形成」「混同」「位置」「その他」の六類型に基づいて整理を行う。さらに、直訳文と意訳文、学習者訳文と日本語母語話者による修正文、参考訳文と学習者訳文といった複数の観点から対照分析を行う。

分析の結果、学習者の言語産出には個人差が見られる一方で、共通する誤用傾向も確認された。また、直訳文と意訳文の比較から、学習者の処理方略および中間言語の特徴に関する示唆が得られた。

17:15-17:45 史曼（中国陝西師範大学）

「基于生成词库理论的汉日并列关系复合动词对比分析」

概要：

复合动词具有语言类型学上的特征，广泛分布于亚洲（尤其是东亚至南亚）语言中（影山 2013）。董秀芳、尹会霞（2021）指出汉语复合词的类型学特点之一是并列关系复合词（包括并列关系复合动词）十分发达。日语中也存在并列关系复合动词。那么，在两种语言中，并列关系复合动词的能产性、词汇化模式及词汇化程度有何异同？该问题并未引起足够重视，本研究拟在数据调查的基础上，对汉语和日语的并列关系复合动词进行统计与对比，并基于生成词库理论进行理论分析。